八月総評　立花開

答えの一切でない祈りに
この夏最後の朝顔ひらく　　桜望子　山形県

答えが出ないから祈るのだ。祈りは、人間が自らが無力であると自覚したとき行われる。何もできないことをそのままに生きるしかないことの心もとなさを補う、生命維持活動。けれど祈る日々が長引くほどに苦しい。一つの季節が終わるほどに長く苦しんだ。いくつの朝顔の花が萎れていったのだろう。

どの瞼ひらけどもひらけども海　　杢いう子　佐賀県

一度でも海を見たら、人はその記憶を消すことはできない。都会の街を歩いていても、愛する人と別れている最中にも、身体には海の記憶がさざめく。けれどそれは主体にとっては望まない眼のようで、あらゆる瞼を開いて海のない眼を探している。

照明には羞恥心がないのだ
だから嫌い　　水木貴奈子　奈良県

照らさないでほしい。私たちの愚かさや醜さまで。他者への寛容さは自身へのそれと繋がる。羞恥心が、その共感が、自分を赦し、他者を赦していく。照明にはその感情がなくて、何もかもを照らしてしまうのだ。まるで正論を振りかざしてくる人のよう。

向日葵の折れる形に祈る人　　田崎森太　東京都

祈りには、なぜか死の匂いが混ざる。祈ること自体には静の色が強すぎる。祈り続けるだけでは、何も変わらないからだ。それが分かっていても祈る以外のことができないとき、我々は少しだけ死ぬのかもしれない。種が重すぎて茎が折れた向日葵の静かに暗い姿と重なった人。

看護師に脈のほそさを謝す秋日　　玻璃　愛媛県

脈のほそさとは血管のことだろうか。そこが読みとれなかったが、私も採血が難しいタイプで共感してしまった。何も悪いことはしていないはずなのに、なぜか謝ってしまう。生命力の弱さのようなものが露呈する瞬間。何かも分からないが〝何か〟を守るために先に謝る。

この部屋を
明日には出ていく私
靴下だけ干す

池田　遥　大分県

終わりの直前まで日常があって、日常の一瞬先に終わりがある。分かっていても、日常をやめることはできない。一本のほそい繋ぎ目として靴下があり、これが乾いて回収されたとき、心も日常も終わりとなるのだろう。

窓開けて風を呼びこむ
誰からも
拭かれなかった看護師の頬

小里京子　北海道

窓を開けて、泣き顔を室内の誰にも見せないようにしている。何度も同じように窓を開け涙を隠してきたのだろう。けれど、上句の爽やかな始まりから、その日々が苦しく悲しいだけのものではなかったことが伝わってくる。働くことの難しさと清々しさを描いた。

足浸す
星座が混ざる夏の水

秋山颯汰朗　群馬県

この「水」は、川の水のような気がする。水は常に流動しているけれど、輝く感じとか常に流れ続けている状態など、川は特別だと思う。混ざっているのが星ではなく「星座」なところに物語を感じさせ、面白い。浸した足は、水だけでなく星座やそれに含まれた物語や時間なんかもかき混ぜてゆく。

障子から夏が滲んでいやらしい

太代　祐一　神奈川県

確かに、夏にはいやらしさがある。なんの根拠もないし考えたこともなかったのに、納得せざるを得ない力がある。仄白い和紙の向こうに夏の影が淡く映り、障子に触れる。そこから何かがじんわりと滲み出て来る。恐ろしさとエロスの終着点は近いのかもしれない。

ひとびとのみみかきは

死に。
今は
暴力が掻いた掻いた掻いた脳まで

羊夏生　東京都

「みみかき」が何のメタファーなのか。私たちは、日々あらゆるものに引っ掻かれている。心地よく掻いてくれるものは少しずつ減り、脳まで達するほどの暴力に晒される。生きていくとは、何なのだろう。命の本質は、どうか愛であってほしい。暴力に慣れることなんかではなく。